



Title	上位・下位の関係をめぐる日中語彙対照研究
Author(s)	太田, 匡亮
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/92229
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名(太田匡亮)	
論文題名	上位・下位の関係をめぐる日中語彙対照研究
論文内容の要旨	
<p>語と語の間に生じる意味関係の一つ「上位・下位の関係」には、各言語間でその様相に異なりが見られ、日中両言語間でもそれが見られる。これが日中コミュニケーション上の問題につながったり、日本語母語話者が中国語を学習するとき、または中国語母語話者が日本語を学習するときに障害となったりする。</p> <p>中国語の語彙を観察すると、中国語における上位・下位の関係は語のレベルに限った問題ではなく、形態素も視野に入れる必要があることに気づく。上位の意味を表す形態素Aと、この形態素が語末に表れ、下位の意味を表す語XAという言語形式が、上位・下位の関係を形成し、意味関係を目に見える形で表現している。一方で、日本語においては漢字語に類似の現象が一定程度見られるとはいえ、中国語ほど体系的ではない。このことが、中国語母語話者と日本語母語話者の上位・下位の関係をめぐる認識のずれ、さらには日中ミスコミュニケーションにまでつながることがある。</p> <p>本稿では、筆者が実際に遭遇した日中ミスコミュニケーション事例などを問題意識の出発点とし、中国語語彙において単漢字形態素という形で顕在化する上位・下位の関係を軸に、下記6章構成で研究を行った。</p> <p>第1章「はじめに」では、問題提起、研究目的、研究方法、論文の構成を示す。</p> <p>第2章「上位概念とはどのようなものか」では、概説書や先行研究を踏まえつつ、上位概念とはどのようなものか、その性質・特徴を記述する。上位・下位の関係は本来純粋に意味的なもので、目には見えないものであるが、時として言語形式の面にも表れることがある。英語の接辞や中国語と日本語の漢字などがそうである。しかしながら、英語の接辞は一目見ただけでは意味が取れない場合も少なくない一方で、漢字は意味を取りやすいという違いがある。中でも中国語で下位語の語末に位置する単漢字形態素は、上位・下位の関係をとらえる上で有力なものである。本章では先行研究と具体例を組み合わせながら、次のような考えを示す。①まず用語については、上位の意味を表すものを、単独で語になるか否かという枠組みを超えて「上位概念」と呼び、下位の意味を表す語も、上位概念と対になる形で「下位概念語」と呼ぶこと、②中国語においては特に、上位概念Aと下位概念語XAという体系的な言語形式によって、上位・下位の関係を目に見える形で表現する傾向があること、③上位・下位の関係は名詞において比較的はつきりと指摘できるので、まずは名詞を考察対象とすること、④下位概念語の範囲は明確な線引きができない場合もあり、プロトタイプカテゴリーによってとらえることが適切と思われること。</p> <p>第3章「上位概念を表す単漢字形態素」では、計量的側面から、上位概念を表す単漢字形態素をリストアップする。そのために次の作業を行う。①《HSK考试大纲 一~六级》語彙表と《国际中文教育中文水平等级标准》漢字表、語彙表を基礎データとし、表中で使用されている漢字をリストアップする、②上位・下位の関係は名詞に見られやすいことから、名詞性を持つ形態素、あるいは単独で名詞となる形態素の絞り込みを行う、③各形態素を辞書で後方一致検索し、下位概念語の有無を調査する、④上位概念を表す単漢字形態素を特定しリストアップする。①の作業で得られた漢字3075字を対象に調査した結果、上位概念を表す単漢字形態素は1436項目確認できた。この資料は付表としてまとめた。</p> <p>第4章「日本語を母語とする中国語学習者向けの上位概念比較対照」では、ケーススタディ研究として日中比較対照の手法により、日本語を母語とする中国語学習者の視点から、学習過程においてミスコミュニケーションなどの問題にぶつかる、あるいは引っ掛けたりを覚えるようないくつかの上位概念を取り上げ、日中比較対照を行う。“羊”と“羊”、“茶”と“茶”、“历”と“歴”、“史”と“史”、“瓜”と“瓜”などの具体的事例を取り上げ、比較対照を行った結果、中国語学習者は中国語語彙理解の側面から言えば、単独で語になるか否かにかかわらず、形態素のレベルに注意を向け、上位概念形態素を正確にとらえる必要があることを主張する。</p> <p>第5章「中国語を母語とする日本語学習者向けの上位概念比較対照」でも同様に、ケーススタディ研究として日</p>	

中比較対照、特に中日訳の問題を通して見る日中比較対照の手法により、学習者の学習過程で、あるいは教育現場で見逃されやすい日中上位概念の「ずれ」を分析し、中国語を母語とする日本語学習者に役立つ情報を提示する。上位概念“楼”と下位概念語“X楼”、上位概念“鞋”と下位概念語“X鞋”という具体的な事例を取り上げ、比較対照を行った結果、日本語学習者は中日訳を中心とする日本語語彙産出の側面から言えば、①言語内・言語外のコンテキストを頼りに、必要に応じて中国語の抽象的上位概念をできるだけ具体化し、日本語の具体的下位概念語に訳す必要があること、②日本語の訳語選択にあたっては、カテゴリーの線引きに注意を向け、訳出時の訳語区別の優先度を意識する必要があることを主張する。

第6章「まとめ」では、まとめと今後の課題を示す。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏名 (太田匡亮)	
	(職) 氏名
論文審査担当者	主査 教授 古川 裕
	副査 教授 林 初梅
	副査 准教授 鈴木慎吾
	副査 准教授 中田聰美
	副査 特任准教授 張 恒悦

論文審査の結果の要旨

『上位・下位の関係をめぐる日中語彙対照研究』と題する本論文は、現代中国語の語彙体系と日本語の語彙体系について上位概念・下位概念という角度から比較対照を行ない、その考察結果に基づいて日本語母語話者に対する中国語教育および中国語母語話者に対する日本語教育に提言を行った論文である。

本論文は、同じ漢字を共有する中国語と日本語にあっては、中国語母語話者と日本語母語話者の間で語彙の上位・下位の関係をめぐる認識のずれがコミュニケーション上のずれを引き起こしかねないという現実的な問題意識から出発し、中国語語彙に顕在化する単漢字形態素を中心に、以下のような構成で論を展開している。

第1章「はじめに」では、問題提起、研究目的、研究方法、論文の構成を示している。

第2章「上位概念とはどのようなものか」では、先行研究を踏まえ、上位概念とはどのようなものか、その性質・特徴を記述している。用語について、上位の意味を表すものを単独で語になるか否かという枠組みを超えて「上位概念」と呼び、下位の意味を表す語を「下位概念語」と呼ぶことを示し、中国語においては上位概念Aと下位概念語XAという体系的な言語形式によって、上位・下位の関係を目に見える形で表現する傾向があることを例示している。

第3章「上位概念を表す単漢字形態素」は計量的な角度から《HSK考试大纲 一-六级》語彙表と《国际中文教育中文水平等级标准》漢字表、語彙表を基礎データとし、表中で使用されている漢字をリストアップしたうえで、名詞性を持つ形態素の絞り込みを行い、上位概念を表す単漢字形態素をリストアップすることで得られた漢字3075字を対象に調査し、上位概念を表す単漢字形態素として1436項目を確認し、その結果を表付にまとめている。

第4章「日本語を母語とする中国語学習者向けの上位概念比較対照」は、ケーススタディ研究として「羊」と「羊」、「茶」と「茶」、「歴」と「歴」、「史」と「史」、「瓜」と「瓜」などの例を取り上げ、比較対照を行った結果、中国語学習者は単独で語になるか否かにかかわらず、形態素のレベルに注意を向け、上位概念形態素を正確にとらえる必要があることを主張している。

第5章「中国語を母語とする日本語学習者向けの上位概念比較対照」では、翻訳を通して見る日中比較対照の手法により、学習者の学習過程、あるいは教育現場で見逃されやすい日中上位概念の「ずれ」を分析し、中国語を母語とする日本語学習者に役立つ情報を提示している。上位概念“楼”と下位概念語“X楼”、上位概念“鞋”と下位概念語“X鞋”という具体的な事例を取り上げ、比較対照を行い、日本語学習者は中日訳を中心とする日本語語彙産出の側面から言えば、言語内・言語外のコンテキストを頼りに、必要に応じて中国語の抽象的上位概念をできるだけ具体化し、日本語の具体的下位概念語に訳す必要があること、日本語の訳語選択にあたっては、カテゴリーの線引きに注意を向け、訳出時の訳語区別の優先度を意識する必要があることを主張している。

第6章「まとめ」では、まとめと今後の課題を示している。

以上のように、本論文は対日本人中国語教育への応用を視野に入れ、中国語構語法の特徴を日本語の漢字語との対照を通じて実証的に分析した好論文である。分析不足の問題点や名詞性以外の語彙への分析など今後の研究に期待する部分も多いが、研究の空白地帯を一定程度埋めることに貢献している点は大いに評価できる。

これらのこととを総合的に判断し、本審査委員会は全員一致で、本論文が博士（言語文化学）学位を得るにふさわしい論文であると判断した。